

巻頭言

学会誌は、以前「讚美歌」(35号)、「祈り」(36号)に合わせるかのよう
に『靈性』(37号)を取り上げた。今回は「聖餐」(42号)を、今秋の全国
研究会議講演の次年度刊行の論文集『説教』(43号)を前にして取り上げ
ることとなった。これは、「新約聖書によれば神が十字架と復活のキリスト
によって造り出す救いは信仰者に対し“御言葉の宣教・洗礼・聖餐”によ
って伝達される」(H.G.ペールマン著『現代教義学総説』)ゆえである。ま
た、ずっと前に『礼拝』(24号)に取り組んだ。そのとき、様々な教派の伝
統を包含する学会であるがゆえ、ルター派、改革派、ホーリネス派に登場
していただいた。折しも、日本基督教団では「聖餐論」が分裂の原因とな
っている(芳賀力編『まことの聖餐を求めて』)。それに言及するかどうか
は論者に委ねられており、それは別として今回は広く、①神学的・教理的
要素、②歴史的要素、③社会的・文化的要素(宇田進著『福音主義キリス
ト教と福音派』)を内包する「福音主義に立つ聖餐論」の多様性の豊かさを
味わいたい。

読者のための読みやすい構成をと考え、論文テーマに沿うかたちで今回
の聖餐論特集を便宜上、①聖書神学の立場から大坂太郎氏『宗教儀式、宣
教行為、そして一致の象徴—Iコリントにおける“主の晩餐”再考—』、山
崎ランサム和彦氏『新約聖書における聖餐—救済史的視点からの概観—』、
②歴史神学・組織神学の立場から正木牧人氏『主の晩餐：ルター派の聖餐
理解と実践』、坂井純人氏『改革派聖餐論の特色—カルヴァンからウエスト
ミンスター信仰基準へ—』、坂本誠氏(日本ナザレン教団)『不信仰に陥っ
た者たちへの励ましとしての聖餐—ウエスレーの宣教のわざとしての聖餐
を基盤にして—』、③実践神学の立場から坂本誠氏(日本同盟基督教団)『今
日のキリスト、今日のパン—礼拝において、今日のキリストをどう表すか
—』、三好明氏『教会形成における聖餐の意義—カルヴァンの立場から—』

の三つの分野に分類させていただいた。

聖餐論特集の巻頭言を書くにあたり、ひとつの文章が心にある。それは「聖霊を取り扱おうとするなら、御霊の恵みが真に必要である。彼について十全な語り方ができるように、というのではなく—それは不可能である—、聖書が教えているものを語ることによって、危険なしにこの主題を身につけるために、である」(H.ベルコフ著『聖霊の教理』)。聖餐論を取り扱うときにも、同じ畏れを抱く。力量不足を自覚しつつ、しかし神学校において組織神学・歴史神学を教えているひとりとして、聖餐に関する問題を基本的に述べ、わずかなりとも聖書解釈と神学構築の領域から福音主義聖餐論の共通性と多様性を見つめる視点と、福音主義聖餐論の聖書の適格性・正統信仰の公同性・現代的適応性・自己革新性に目配りできる材料とを提供しておきたい。

ではまず、聖餐の「聖書の適格性」と「正統信仰の公同性」の領域に目配りしたい。神学的・教理的要素からみて、聖餐とはいかなる儀式なのであろうか。洗礼は入会の儀式であるが、聖餐は見える教会で継続されている儀式である。聖餐とは、キリストご自身が、ご自身の死の記念として行うようにと教会のために制定した儀式、と予備的に定義できる。ただ、私たちはすぐに聖餐についての奇妙な事実と出会う。キリスト教の事実上すべての教派が聖餐を行っている。聖餐はキリスト教のほぼ全ての教派をつなぐ“共通要素”である。しかしその一方で“いろいろな解釈”が存在する。歴史的にも、クリスチャンをいろいろなグループに分断してきた。つまり聖餐はキリスト教界を“一つにする要素”であると同時に“分ける要素”なのである。いくつかの伝統または教派は、一般的かつ非常に重要な課題に関してかなり一致している。それは、①キリストによる制定、②繰り返しの必要性、③福音告知の形態、④あずかる者への福益、⑤キリストに従う者への限定等についてである。反対に、一致しない点もある。それは、①キリストの臨在、②儀式の効力、③適切な執行者、④ふさわしい受け手、⑤使用されるパンとぶどう酒等についてである。その中でも、焦点になるのは「キリストの臨在」の問題であり、パンとぶどう酒は、(a) カトリック—キリストの物理的なからだと血“である”[are]、(b) ルター派—

物理的なからだと血を“含む”[contain]、(c) 改革派—からだを“霊的に含む”[contain spiritually]、(d) ツヴィングリ派—からだを“象徴する”[represent]、等の代表的解釈がある(M.J.エリクソン著『キリスト教神学』)。

次に、聖餐の「現代的適応性」と「自己革新性」の領域に目配りしたい。福音派とは教会の歴史において幾重もの発展や発達過程を経て生成を見るに至った生きた実体である。そして、その歴史の中で形成されてきた聖餐論もまた然りである。プロテスタント教会の礼拝の歴史、また聖餐の歴史を眺望すると、神学的・教理的要素のみでなく、歴史的要素、社会的・文化的要素もまた大きな比重を占めており、歴史的状況の中での変化に応じて多様な礼拝伝統が生まれてきた経緯がある。16世紀には、50年間に五つの重要なプロテスタント礼拝の伝統が形成された。ルター派、改革派、アナバプテスト、アングリカン、ピューリタンの諸伝統は、1520年から1570年までの間に恒久的な礼拝の形式や順序をしっかりと形成するに至った。中世後期までに生み出されたいろいろな会衆と信仰行為に対応するきわめて多様な可能性がこの短期間に出現した。その後の数世紀間にこうした展開の速度は緩やかなものとなっていったが、それでもそのプロセスそのものは確実に継続していった。平均すると一世紀にひとつの割合で新たな伝統が生まれた。17世紀にクェーカーが、18世紀にメソディストが、19世紀にフロンティア派が、そして20世紀にはペンテコステ派が生まれた。こうした九つの伝統のそれぞれにおいて、多様な民族的文化的集団にその伝統を適応させるための様々な形式が発達した。このように聖餐論の伝統と歴史的展開を福音と文化の“コンテクスチュアリゼーション”から眺望する視点も見落としてはならない。

そして、現代という時代は、プロテスタントとローマ・カトリックの双方において、西方教会の礼拝が互いに接近しつつある時代のように思われる。多様な伝統の豊かさがこれほど広く分かち合われたことはいまだかつてなかった。それにもかかわらず、もろもろの伝統が接近する際、そこに一定の危険が伴うことは避けえないことであって、ある特定の伝統がそこから得るものは、そこで失うものに対して釣り合いのとれたものでなけれ

ばならない。こうした接近があまりにも極端なものとなる場合、私たちはそこでプロテスタント教会の多様性における豊かさが犠牲となるようなことが生じないかどうかを問わねばならない。プロテスタント礼拝の豊かさとは、その多様性にあるのであり、またその多様性ゆえに広く様々な立場の人々に仕えることができる可能性があるのである（J.F.ホワイト著『プロテスタント教会の礼拝—その伝統と展開—』）。

さて福音主義聖餐論は、その歴史的経緯が示すように、共通性とともにも多様性を内包している。今日、福音主義神学会は、この共通性と多様性をどのように理解すべきなのかを問われている。一方で聖書の中に“普遍的規範”を見出そうという試みがあり、他方に“規範の喪失”という事態が散見される。聖書の十全靈感を信じる福音主義神学会における聖餐論は、今何処にあり、何処に向かおうとしているのだろうか。『新約はまた、受け入れられうる多様性の限界線を描き出すところの正典として機能する』

（J.D.G.Dunn “Unity and Diversity in the New Testament”）と言われる。靈感された聖書の御言葉から発し、伝統というかたちでコンテクスチュアライズされた聖餐論は、多様性の限界線をどのように照らし出しているのだろうか。私たちは、今回執筆された聖餐論から、その聖餐論が構築された歴史的背景、問題意識、聖書解釈、神学形成、実践と効用、そしてそれらの歴史的変遷等を学びあいたい。そしてそのことを自派の伝統を確信し継承・深化・発展させる契機にすると共に、他派の伝統へのより深い理解と尊敬をも学びあう時としたい。

In essentials, unity;
in non-essentials, liberty;
In all things, charity

（編集委員 安黒務）